



ポイヤウンベの戦い 最終回

「金城マツ版 虎杖丸」から 文：瀧口夕美 絵：小笠原小夜

敵をたおし、故郷へ



私、ポイヤウンベは、フチ（おばあさん）の姿であたりを飛びはねた。そんなことをしたのは、私の敵で村の勇者ニソルンサンタが「化け物のまねをし」と、何度もねだってきたからだだった。ふと自分の体を見ると、毛のぬけたキツネのように、胸やおなかの木を並べたようにしわがたくさん寄っていた。

はるか遠くの山から現れた私のつき神は、ごうごうと風をふかせて地面を打った。家の中にも風はふきこんで渦を巻き、あちこちで火が燃え上がった。ニソルンサンタはおびえ、こう言った。「フチ、私が悪かった。助けてください」。しかし私はさらに激しく飛んだ。家の中にいた村人はあちこちに散った。やがて私の視界は二つ、三つとなっていく、暗い谷のふちに行き当たった。

気が付くと私は黒くあれた地面に寝転んでいた。足や手はこわばり、とてもつかれていた。そうだ、私はいっしゅんで地面をひっくり返したのだ。「姫はどこだろう」と心配していたが、しばらくすると遠くから人影が現れた。ニサッタスム姫だ

った。「この村にあるものはなにもかも、悪い土地の空へ追いやられた。あなたのつき神の力です」。私は姫を引き寄せ、ひたいにキスをした。

ニソルンサンタとの戦いが終わったので、私は姫とともに天空に上った。はるか先を見わたすと、故郷シヌタナカのカムイの岩が天にそびえていた。自分の家の近くに、私たちは鳥のようにまい降りた。

家に入ると、兄や姉たちはみな立ち上がり、大きな声を上げて喜んだ。私は兄たちといっしょにおどり、大きな家がゆりかごのようにゆれた。姉や妹たちは泣きながらおどって歌い、その声が美しくひびいた。私はこう言った。「猛毒を持つ悪



いかムイがここへ来て、みな毒のために死んだ。しかしこの姫が、私の敵の側の生まれであるのに、私たちみんなを術で元の体にもどしたのです。姫によく感謝してください」。兄たちはニサッタスム姫にいてねいに礼をのべ、女たちは順に姫の周りに寄って泣いた。私は金のベッドの上に座った。そして、姉の作った料理をみんなで食べた。

それからはみんなで仲良く過ごした。女たちは絹の布にししゅうをし、男たちは、刀のさやに美しい彫刻をした。けれども、戦いの時代はまだ終わっていない。私は、いつ終わるかわからない戦いが頭からはなれず、ねむっているあいだも、悪人たちを夢に見ながら暮らした。

=おわり=

ミンタラは1月からアイヌ語を伝えるコーナーになります。12月はお休みです。

これまでの話は「まなぶんデジタル」=QRコード=で読めます

